

座長のことば

肺癌の集学的治療

本間 栄

東邦大学医学部内科学講座呼吸器内科学分野 (大森) 教授

日本では肺癌による死亡者数が年間7万人(2011年)を超え、癌の中でも最も死亡者数の多い難治性疾患である。特に非小細胞肺癌に対する最も根治性の高い治療法は早期発見・外科的切除である。しかしながら、IIIA期になると術後再発率は70%以上に達する。そこで、治療成績を向上させるために、術前、術後に化学療法や放射線療法さらにリハビリテーションを加えた集学的治療が注目されている。今回のシンポジウムは肺癌の集学的治療ならびに高リスク症例に対する当院の取り組みについて、その診療・研究に造詣の深い最適の4演者にお話し、呼吸器外科学講座により企画された。今年の2月14日は首都圏2回目の大雪となり執行部の英断で講演会はやむなく中止されたが、誌上発表でその充実した内容を確認して頂きたい。

(1) 呼吸器外科の立場から秦 美暢准教授に手術適応とその成績、早期肺癌に対する低侵襲手術の胸腔鏡補助下手術(video-assisted thoracic surgery: VATS)と縮小手術、術後補助化学療法の成績と多施設共同研究、高リスク症例(低肺機能合併肺癌、超高齢者肺癌)に対する治療戦略等についてご報告頂いた。

(2) リハビリテーション科の立場から大國生幸講師に特にchronic obstructive pulmonary disease (COPD)合併ならびに高齢肺癌患者の周術期リハビリテーションに関し、当院での取り組みについてご報告頂いた。その中で、呼吸器外科手術が実施された肺癌患者の運動耐用能は、膝伸筋筋力・認知機能・健康関連 quality of life (QOL)と関連することが示された。

(3) 呼吸器内科の立場から磯部和順講師に非扁平上皮癌でのここ数年のトピックスについてご報告頂いた。特に遺伝子変異陽性患者における分子標的治療やペバシズマブ併用療法の有用性、分子標的薬と局所治療(手術・放射線治療)の集学的治療の展望などが示された。

(4) 放射線科の立場から宮本一成講師には主に非小細胞肺癌の術前放射線化学療法、根治的放射線化学療法の現状についてご報告頂いた。特に現時点では治療成績向上のための放射線総線量増加の寄与は否定的であり、照射方法の工夫や化学療法のレジメン変更等が模索されていることが示された。